Senzoku Gakuen College of Music

Green-Tie Wind Ensemble

洗足学園音楽大学

グリーン・タイ ウインド・アンサンブル

演奏会

2023.3.10

19:00 開演

18:30開場／20:30終演予定

洗足学園 前田ホール

主催

洗足学園音楽大学・大学院

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場して下さい。
・客室内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

電子プログラムについてのお願い

・客席内は電波を遮断しておりますので、ダウンロードは、ロビーなどインターネットに繋がる環境にてお願いします。
・演奏中のスマホ、タブレット端末等電源オフの必要はありません。ただ、不用意に音が出ないように留意願います。
・基本的には、演奏中のプログラムの閲覧はご遠慮いただき、ぜひ、演奏に目や耳を傾けていただけたらと思います。しかし、もし演奏中にプログラムをご覧になりたい場合には、周りのお客様のご迷惑にならないよう、画面の明るさなどにご配慮をお願い申し上げます。

洗足学園音楽大学

グリーン・タイ ウインド・アンサンブル演奏会に

ご来場いただき

ありがとうございます

最後までごゆっくりお楽しみください

Twitter

Instagram

SENZOKU.GWE

ぐりんぐりん吹奏楽!Green-Tie Tube

YouTube

Facebook

指揮 ：齊藤一郎

Ichiro SAITO, Conductor

福井県出身。東京学芸大学、及び東京藝術大学音楽学部指揮科卒業後、文化庁新進芸術家海外研修員としてウィーンで研鑽を積む。東京藝術大学在学中に安宅賞受賞。2000～2004年NHK交響楽団アシスタントコンダクターを務めた。

1997年大阪センチュリー交響楽団（現・日本センチュリー交響楽団）を指揮してデビュー。2002年にはN響を指揮、2003年関西フィルハーモニー管弦楽団で定期公演に初登場。国内主要オーケストラに客演を重ねる他、スロヴァキア・フィルはじめ複数の東欧圏のオーケストラとも共演している。

2009～2014年セントラル愛知交響楽団常任指揮者（現在、同団首席客演指揮者）、2014～2019年京都フィルハーモニー室内合奏団音楽監督。こだわったプログラミングと細部まで追求した練習で両楽団を個性と実力を併せ持つ楽団に引き上げ、齊藤の手腕は高く評価された。

古典作品から国内外の現代作品、映画音楽やポップスまで幅広いレパートリーを持つ。特に、芥川也寸志、黛敏郎、伊福部昭、松村禎三など日本の現代音楽を切り拓いてきた作曲家の作品をたびたび演奏する他、同時代の作曲家たちへの委嘱作品初演など、邦人作品への取り組みは大いに評価されており、2014年名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞、齊藤がプログラミングならびに指揮をした2016年4月の京都フィルハーモニー室内合奏団定期演奏会が佐川吉男音楽賞奨励賞を受賞。

文化庁等が主催する小中学校公演で、クラシック音楽を子どもたちに伝える普及活動も熱心に行っている。
https://www.3s-cd.net/ichirosaito/

Programme

F.ショパン（伊藤康英 編曲）／ワルシャワ砲撃のエチュード（革命のエチュード）
Frédéric Chopin (1810-49)(arr. by Ito, Yasuhide) / Étude on the Bombardment of Warsaw (Revolutionary Étude) (3:00)

V.ネリーベル／シンフォニック・バンドのためのファンタジア
バッハの平均律クラヴィア曲集第1番前奏曲による（1981）
Václav Nelhýbel (1919-96) / Fantasia for Symphonic Band, based on Bach's Prelude I from the Well-Tempered Clavier (5:00)

C.フランク（鈴木英史 編曲）／3つのコラールより第3番イ短調
César Franck (1822-1890)(arr.by Suzuki, Eiji) / Choral n 3 en la mineur de "Trois chorals" (7:30)

S.ラフマニノフ（伊藤康英 編曲）／交響的舞曲op.45aより第1楽章
Sergei Rachmaninoff (1873-1943)(arr. by Ito, Yasuhide) / 1st movement from "Symphonic Dances" op.45a (12:00)

伊藤康英／スパニッシュ・ホルン　ホルンと吹奏楽のための小協奏曲
Ito, Yasuhide (*1960) / The Spanish Horn, Concertino for Horn and Band (10:00)

ホルン独奏: 佐藤俊輝（学部4年）
Sato, Toshiki: Solo Horn

intermission

L.セラーノ・アラルコン／交響曲（2012）
Luis Serrano Alarcón (*1970) / Symphony (33:00)

I プロローグ:激しく
II アレグロ・ヴィヴァーチェ
III アダージョ:突然にスケルツァンドで～最初の速さで
IV エピローグ:最初と同じに

I Prologue: Furioso
II Allegro Vivace
III Adagio - Scherzando subito - Adagio Tempo I
IV Epilogue: Come Prima

指揮:齊藤一郎
Saito, Ichiro : Conductor

解 説

伊藤康英

「おもろいことをやりましょう！」。

齊藤一郎氏を私は、グリーン・タイの指揮にこう言ってお誘いした。

一昨年９月のこと、オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラのコンサートに入国制限のため来日不能となったダグラス・ボストック氏に代わり、急遽指揮台に立ったのが齊藤氏だった。真島俊夫＋伊藤康英というプログラムを見事に音楽的な表現で堪能させてくれたとき、グリーン・タイとだったら何か「おもろい」ことができるのではないかと確信した。本日それが実現したことを大変に嬉しく思う。

プログラムを相談している際、「おもろい」がしかし無謀すぎる提案があった。ピアノも達者の齊藤氏から「ショパンの練習曲全曲を吹奏楽に編曲してやりましょう」とのこと。さすがにそれは難しいと思いつつも、本日の演奏会は１曲だけ新たに作ったショパンの練習曲で始める。

本日のプログラム前半のコンセプトは「編曲」。

編曲というのは、単に楽器編成を変えるもの（＝トランスクリプション transcription）から、オリジナルの作曲作品に近いもの（＝アレンジメント arrangement）まで幅が広い。さまざまな編曲を通して、吹奏楽の演奏表現や色彩感をどこまで広げられるかが目標である。

●F.ショパン（伊藤康英 編曲）／ワルシャワ砲撃のエチュード（革命のエチュード）

およそショパンのピアノ作品ほど吹奏楽に似合わないものはない。ピアノの鍵盤だけでショパンはすべてを語り尽くし、その世界は果てしなく広いからだ。

ショパンの「練習曲集」は、音楽的にも充実しているため、単なる「練習」にとどまらず、しばしばコンサートでも演奏され、《別れの曲》などの名作も多い。作品 10、作品 25 それぞれ 12 曲からなり、全 24 曲で構成する。（実際にはそのほかに３曲書いている）。

今回、《ワルシャワ砲撃のエチュード》といかめしい題名をつけたこの作品は、いわゆる「革命のエチュード」として知られている作品 10-12。英語でそのように呼ばれることもあるため、今回はこの題名で披露することとした。

1831 年の 11 月蜂起でのロシアのワルシャワ侵攻の時期に発表。祖国ワルシャワが侵攻された感情を書き表したとも言われる。

（未出版）

●V.ネリーベル／シンフォニック・バンドのためのファンタジア バッハの《平均律クラヴィア曲集》第１番前奏曲による

チェコ語の発音に近く「ネリーベル」としてみた。ほんとうは「ネルヒーベル」のほうが正確なのだが。もっとも、アメリカに移り住んだので、実は「ネリベル」で良い。以降は慣例に従おう。

ネリベルは、スクールバンド向けの作品をたくさん残している。この作品はおそらくその部類に属する。（とは言え、取り組んでみると難しい点は多々あるのだが）。バッハをもとにした教育的な作品といえよう。Ch.グノー（1818-1893）がメロディーを付けて《アヴェ・マリア》を作曲した、ということでも有名な、《平均律クラヴィア曲集》第１巻第１番のプレリュードの和声をそのままにネリベルが編んだ作品である。その点で編曲とも言えようが、リズムの扱いなどネリベルらしさが濃厚な独特な作品である。

木管楽器群に始まり、テンポを上げて金管楽器のアンサンブル、次いでトランペット独奏にホルンを加えて全員で演奏する、という三部構成。

楽譜は、J. Christopher Music Company より出版されているが、ネリベルの奥様は、これは正式な出版ではないと主張する。

ネリベルについての日本語資料が少ないながら、2015 年のグリーン・タイ ウインド・アンサンブルで《トッカータ・フェローチェ》を演奏した際に、ネリベルについて詳しく研究され楽譜の発掘を行い、奥様との交流がある村上泰裕氏にネリベルの生涯を綴っていただいた。それを本稿の末尾にそのまま転載する。そのためこのときに取

り上げたA.リード（1921-2005）氏についても言及することとなっている。

なお、グリーン・タイでは、ネリベル作品をしばしば取り上げており、なかでも前述の《トッカータ・フェローチェ》は日本初演、《The S-S-S》は世界初演を行っている。

●C.フランク（鈴木英史 編曲）／３つのコラールより第３番イ短調

今年生誕200年を迎えたC.フランクのこの作品の原曲はパイプオルガンのために書かれている。吹奏楽編曲のコンセプトについて鈴木英史氏はこう語っている。

オルガンと吹奏楽は成り立ちが一緒だ。管楽器の集合体、倍音の豊富さ、など。このアレンジではオルガンのストップの倍音を含めて、バンド全体を一つのオルガンと見立てている。上声部に聴こえる倍音、各パートのブレンドから産まれる新たな倍音鍵盤のつかみ方、などを想定したアレンジがなされている。

フランクは、19世紀最大のオルガンの作曲家・演奏家と言えるだろう。代表作として知られる《交響曲》でさえ、全編にわたってオルガンの響きが想定される箇所が多数見られる。フランクはまた、半音階を多用した独特の和声法が魅力的である。

全曲は10分以上の作品だが、ここでは短くまとめられている。

この編曲は1993年につくられ東芝EMI株式会社の『新・実践吹奏楽指導全集』に収められているが、このたび若干の改訂が施された。

（出版：ソニーミュージックパブリッシング）

●S.ラフマニノフ（伊藤康英 編曲）／交響的舞曲op.45aより第１楽章

この編曲は、2014年にグリーン・タイ ウインド・アンサンブルにて初演した。そのときのプログラムを一部改訂して引用する。

ピアニスト、作曲家として知られたS.ラフマニノフ（1873-1943）はロシアに生まれ、1917年以降はアメリカに暮らした。1940年にニューヨークで作曲されたこの《交響的舞曲》は、ラフマニノフ自身、これが最後の煌めきになるだろうと予感していた。

３楽章からなる管弦楽作品として構想されたが、まず２台ピアノのための版が８月10日に完成（op.45a）。ラフマニノフ宅の私的な演奏会で、ピアニストであるウラディミール・ホロヴィッツ（1903-1989）とラフマニノフにより演奏された。その後、管弦楽編曲を行い、10月29日に完成。翌年の１月３日に初演された。

私が担当するグリーン・タイ ウィンド・アンサンブルでは、原則として管弦楽作品から編曲された吹奏楽作品は取り上げない。管弦楽と同じような大人数を擁する吹奏楽では、往々にして管弦楽とどれだけ同じようなサウンドがするか、という点で評価されがちだからだ。それでは管弦楽の代替物でしかなく、吹奏楽そのものの意義が薄れてしまうと思うからである。一方このラフマニノフの作品は、管弦楽版のみならず、２台ピアノ版でも広く愛好されている。室内楽曲として楽しまれる２台ピアノ版は、管弦楽より貧弱だとは決して言えまい。２人の奏者が対峙することで醸し出すスリリングな表情、打鍵楽器としてのピアノの魅力、想像力としての音色の魅力の世界へとわれわれを誘う。

さて、たとえばほんとうの原曲である２台ピアノ版に基づいて吹奏楽編曲を施せば、管弦楽とは異なった色彩が味わえるのではないか。そう考え新編曲を作った。もちろんラフマニノフの意図とは異なったものとなるだろう。しかしそれが編曲の妙味であり、ある意味、私自身の作品であるとも言える。吹奏楽ならではの色彩を味わっていただきたい。

楽器編成としては、オーボエ２本、バスーン２本を含み、サクソフォーン・セクションは、ソプラノ、アルト、テナー、バリトンがそれぞれ２本ずつ、さらにバスが加わる。金管楽器にはコルネットとバリトンを用いた。ラフマニノフの管弦楽版に含まれているピアノは用いず、あくまで管楽器主体の編曲となっている。

この第１楽章は、たとえばピアノ練習曲集《音の絵》op.39 の中の終曲に似た行進曲ふうな味わいを持ちつつも、中間部のラフマニノフ独特の甘美なメロディが印象深い。

白鳥は死の直前に美しく鳴く、と古いギリシャ神話は言う。ラフマニノフの「白鳥の歌」を、さて、みなさんはどう聴きますか。

（出版：ブレーン株式会社）

●伊藤康英／スパニッシュ・ホルン ホルンと吹奏楽のための小協奏曲

ホルン四重奏のために《スパニッシュ・ホルン》という曲を書いたことがある。現在のホルンは「フレンチ・ホルン」と呼ばれるが、「イングリッシュ・ホルン」なるダブルリードの（オーボエの仲間の）楽器もあり、それならば「スパニッシュ・ホルン」という楽器があっても面白いかも、あるいはそういう名前の作品があったら楽しいだろうと作曲したものだ。その名の通り、スペインらしいメロディを用いたり、中間部には、いわゆる「ラ・フォリア」も現れたりする。これは「スペインのラ・フォリア」とも呼ばれ、F.リスト（1824-1886）もピアノ曲《スペイン狂詩曲》で使用している。ほかにも A.コレッリ（1653-1713）はじめ多くの作曲家がこの主題を用いている。

それをもとにホルンと吹奏楽のために作り直した。その意味では「編曲」となる。スペインらしさを堪能いただきつつ、プログラム後半のスペインの作曲家作品へと繋ぐ。

ホルン独奏は、本年度グリーン・タイ ウインド・アンサンブルに在籍する佐藤俊輝の独奏でお届けする。佐藤は神奈川県生まれ。12 歳よりホルンを始め、2020 年、第 89 回日本音楽コンクールにて第２位（１位なし）並びに瀬木賞を受賞。これまでにホルンを飯笹浩二、日高 剛、高橋臣宜、室内楽を辻 功、渡辺 功の各氏に師事。今後の活躍に一層の期待を寄せたい逸材である。

（未出版／イトーミュージック（予定））

●L.セラーノ・アラルコン／交響曲

セラーノが父方、アラルコンが母方の苗字であり、ここでは「L.セラーノ・アラルコン」と綴っているが、通常は海外でも「アラルコン」の呼び名で通っている。

スペインはバレンシア近郊のチバ出身。現在はバレンシアに居を構え、自社アラルコン・ミュージックも経営している。

ヨーロッパの吹奏楽はなかなか日本に入ってこないが、ヨーロッパに限らずアメリカやアジアで人気の作曲家。

この《交響曲》は、強烈な D 音のオクターヴ跳躍の反復から始まる。テンポは二分音符＝80。この音程とテンポが全曲を支配する。次いでホルンに現れる十六分音符の分散和音音型、これも重要なモティーフとなる。30 分を要するこの作品を支配するのは、突き詰めればこの２つの要素のみに集約できると思われる。

以下、作曲者のウェブサイトからの解説をざっくりと訳しつつ引用する。

10年以上の間、吹奏楽のために大規模な作品の作曲に専念してきたが、そのほとんどは、標題音楽的なものだった。サウスイースタン・カンファレンス・バンド・ディレクターズ・アソシエーションによるこの委嘱作品は、私にとってそれと相対する作品を作曲する絶好の機会となった。それがこの私にとっての初めての「交響曲」である。標題的な特徴を取り除き、19世紀の偉大な交響曲の伝統に沿って作曲した。形式の基盤と、モチーフの展開が作曲上の主眼となっている。

この作品は循環形式による交響曲であり、４つの楽章に分かれているが、大きく２つに分けられる。第１の部分は、第１楽章「プロローグ」とそれに続く第２楽章。第２の部分は、第３楽章と第４楽章「エピローグ」。

短い「プロローグ」は、Furiosoと書かれ、しつこく作品の主要主題に執着する。それは単純なオクターヴの動機である。

第２楽章の Allegro Vivace は、通常は第１楽章に見られるソナタ形式で書かれている。これは、クラシックおよびロマン派の交響曲に特徴的な形式である。このため、プロローグを交響曲の第１楽章としてではなく、正確にはAllegro Vivace

（第２楽章）への導入として考えている。基本的な構造は次の通り。

提示（1〜243小節）－展開（244〜446小節）－再現（447〜604小節）

作品の中で最も長大な第３楽章では、大きな交響曲ジャンルの２つの特徴的な形式（注：緩徐楽章とスケルツォ）を一つにまとめあげた。スケルツォとトリオを挟んだ三部形式となっている。

第３楽章でよりまとまりを持たせるために、スケルツォの主要主題は、実際には最初のアダージョの主要主題の変形であり、最初に独奏ホルンによって繰り返されるオクターヴのモチーフに基づいた導入部に引き続いて現れる。

エピローグは、第３楽章アダージョの終わりから繋げて演奏される。冒頭のプロローグの文字通りの要約であり、作品を壮大な結論に導く華麗なコーダを追加し、交響曲を「循環」させる特徴を強調している。曲は D 音の強力なユニゾンで終わるが、それが曲全体の主要なトニックであることは明らかである。

以上の説明の中、「循環主題」という言葉が現れる。これはC.フランクの《交響曲》や《ヴァイオリン・ソナタ》などで見られる。一つの主題がどの楽章にも通じて現れることを指す。

さらに、作曲者自身「標題音楽ではない」とは言うものの、たとえば第３楽章には普段用いない音楽用語がイタリア語で書かれているのは特徴的である。（イタリア語とスペイン語は近い関係にあるので、これらの用語は極めて適切な使い方がされている）。第３楽章は sottile（細い）なコントラバス、ハープ、チェレスタ、金属鍵盤楽器で始まり、ついで、nostalgico（郷愁）を誘うバリトン・サクソフォーン、disperato（絶望的）なピッコロ。ややあって gentile（穏やか）なホルンの独奏、そして spirito（精神）を込めたフルートの独奏は次第に elevato（気品をもって、気高く）なり、introspezione（内省的）なオーボエのソロは lamento（悲歌のように）、そして次第に rassegnato（諦め）をもち、straziante（責めさいなむ）ようなトゥッティとなる。８分の３拍子の「Scherzando」（スケルツァンド、陽気）な音楽になるとバスーンなどが incisivo（鋭利な）なスタッカートを演奏する。サクソフォーンとイングリッシュ・ホルンは banale（ありふれた）メロディーを、トロンボーンなどは riluttanza（不承不承）それを支える。giocoso（滑稽）な音楽が続く。トランペットの独奏によりそれまでの音楽が反行型（音の高さが上下反転）となり tristezza（悲しみ）を蓄える。（その後再現される「Scherzando」は反行型となる）。しばらくあって、イングリッシュ・ホルン独奏が sentito（感じ入って）メロディーを歌うと次第に pienezza（満ち足り）、ホルンは temperanza（節度）をもって応ずる。音楽は次第に intenso（集中）を高め…という流れを見ると、とくに第３楽章にはかなりのドラマ性が込められていると見ることができる。

それにしても強固に構築された作品である。グリーン・タイでは、これまでに《ドゥエンデ》《コンチェルタンゴ》(第１楽章のみ)、《小組曲》、パソドブレ数曲を日本初演してきた。これらの作品には、時としてスペインを思わせたり、ジャズを思わせたりするものがある。しかし《交響曲》には、スペインらしさの微塵もない。完全に絶対音楽として描かれた厳しさがある。

ピッコロ・トランペット、ハープ、ピアノ、チェレスタも擁する大編成吹奏楽でじっくりとお楽しみください。

少々付記すると、2018 年、私は初めてアラルコン氏と会った。それまではインターネットを通じて交流をしていたのだが、中国とシンガポールに行く際に２週間ほど空くので日本に寄ってみたいと連絡があった。それが彼の初来日。そこで、グリーン・タイでワークショップを開いたり、ちょうど浜松で開催されていた APBDA（アジア・パシフィック吹奏楽大会）にお連れしたりして日本を案内した。

2019 年には、彼の生まれ故郷近くの街ブニョールで WASBE（世界吹奏楽大会）が開催された際、彼が指揮するアルソビスポの吹奏楽団に客演指揮として招いていただき、拙作を披露する機会をいただいた。

本来ならば 2020 年のグリーン・タイにお招きする予定であったが、残念ながら中止。またいつの日か招聘したいと思う。

（アラルコン・ミュージック／ブレーン株式会社）

危機を乗り越え、生き方を貫いた作曲家 ヴァーツラフ・ネリベル

村上泰裕

往年の吹奏楽ファンには懐かしい作曲家ヴァーツラフ・ネリベル。日本でよく演奏される作品は10曲たらずだが、その強烈な個性に根強いファンも多い。一般に知られる彼の曲の特徴は、短い動機の反復と力強い展開、古い旋法と大胆な不協和音の共存、管楽器の重厚な輝きや打楽器の活躍などだろう。これらを総称し「ネリベル・サウンド」と呼ぶ方もいる。ただ、ネリベルの生涯はあまり知られておらず、この機会に少々長くなることをご容赦いただきながら彼のプロフィールを紹介しておこう。

1. 音楽へのこころざし（1919年～）

ヴァーツラフ・ネリベルは1919年9月24日、チェコスロヴァキアのポラーンカ・ナト・オドロウという小さな村に生まれた。比較的裕福な農家の5人兄姉の末っ子。6歳で作曲家を夢見るが両親に反対され、親に内緒で時々ロシア正教会を訪れ、アカペラの礼拝音楽を聞いた。11 歳でイエズス会が運営する全寮制のギムナジウム（中等学校）に入学、独学で学校のオルガンをマスターし、校内のオルガニストが急死してから数年間代役を務めた。また、校内で有志を集めてオーケストラを作り、自ら編曲や作曲を行なった。学業成績は抜群で、和声学や対位法などを独学。17 歳で首都プラハにあるイエズス会の別の寄宿舎学校に転校した。卒業間近の1938年5月、チェコの知識人を侮辱したドイツ人校長にイスを投げつけ自宅謹慎処分になるが、イエズス会から支持を受けて卒業した。

2. 忍び寄るナチス・ドイツの影と三度の命拾い（1938年～）

1938年8月、チェコの最高学府であるプラハ・チェコ大学（現・プラハ・カレル大学）に入学。ギリシャ・ラテン文学を専攻した（音楽は学問の対象）。翌月ヒトラーがミュンヘン会談でネリベルの故郷をドイツに併合したことで、家族と完全に離別。それ以降はラジオ・プラハで作曲、聖トーマス教会で伴奏のアルバイトをしながら学業を続けた。1939年3月、ヒトラーはチェコスロヴァキアを解体し、全土にドイツ軍を進駐させた。

① チェコ大学から音楽学校へ　11月、ドイツ軍が知識人を一掃するため各大学を閉鎖、学生を次々に逮捕して強制収容所に送った。一部始終を目撃したネリベルはチェコ音楽学校プラハ校（現・プラハ音楽院）にかけ込み、作曲学科に編入学して難を免れた。当局は音楽学校の学生は無害と考えていた。

② ゲルリッツへ　1940年の秋、逃亡した大学生を探すドイツ軍に見つかり、ドイツのハンブルクでの強制労働を言い渡された。だが、出発日までにドイツのゲルリッツ市民劇場の伴奏者募集に応募して採用され、強制労働を免除された。

③ プラハへ帰還　1941 年 1 月からゲルリッツの劇場で渋々働いたが、秋頃から手首の病気を装った。当局は仮病を見抜けなかったが、不信感からネリベルを6週間の自宅軟禁に処した。ネリベルは劇場で不足している合唱団に加わって歌うことで当局を納得させ、クリスマスに一時帰郷の許可が出た。プラハでも検査を受けたネリベルは、病気が重度で就労不可という診断書を盾にプラハにとどまった。意図的な逃亡はほどなく明るみになったが、多くの団員を外国人に頼る劇場側は、団員たちを動揺させないよう告発を見送った。大戦末期、団員たちは全員重労働に借り出された。

3. 戦後、共産化する祖国との別れ（1945 年～）

1945年5月、ソ連軍がプラハを解放して終戦を迎えると、ネリベルは再開したチェコ大学でスラヴ民謡のリズムをテーマに博士論文を書く準備を始めた。翌年、環境の良いスイスのフリブール大学に留学し、学びながら講師として作曲と音楽理論も教えた。戦後解禁されたストラヴィンスキーの音楽に感銘を受けたネリベルは、スイスでストラヴィンスキーと懇意の指揮者エルネスト・アンセルメや、ストラヴィンスキーの息子テオドルと親しくなり、論文のテーマを《兵士の物語》に変更した。

1948年2月、チェコスロヴァキアの共産化が避けられないことから、ネリベルは祖国との別れを決意。「鉄のカーテン」で国境の往来が制限される中、列車でどうにかプラハに入り、自筆譜や

資料を中心に数箱の荷物をもって引き返した。パスポートを警察に預けて無国籍となり、スイスに滞在し続けて10年後に国籍が下りるのを待つことにした。フリブール大学での講師やスイス国営放送での作曲・指揮など活躍の場には恵まれた。ただ、完成した論文が提出できないことへの苛立ちがつのり、ある日アンセルメの家で論文を焼いた。これでネリベルは気持ちを切り替え、前向きな人生を歩み出した。

1950年、朝鮮戦争が米ソを巻き込む国際紛争に発展し、スイスの地も安心できないと感じたネリベルはカナダへの移住手続きを整えた。ところが同じ頃、ミュンヘン（西ドイツ）に開局予定のラジオ・フリー・ヨーロッパ（自由ヨーロッパ放送）から初代音楽ディレクター就任の要請を受け、ヨーロッパに踏みとどまった。アメリカ政府の運営により共産圏諸国に西側の情報を伝える放送局で、1951年5月に本放送が始まった。仕事は充実していたが、半年後ミュンヘンにいる限りスイスの滞在ビザが更新されないことを知った。アメリカ移民や市民という立場なら放送局勤務を続けられることから、ニューヨークに短期滞在して移民となり、その後も定期的に渡米して国籍取得を目指した（ネリベルはチェコ語、独語、仏語、ポーランド語、ロシア語、イタリア語に加え、この頃に英語も覚えた）。ところが1956年、米ソ間における緊張の高まりを受け、番組は政治色を強め、音楽番組が激減した。これを機にネリベルは局を辞め、新婚のドロシアを伴い、自力で移れる唯一の国であるアメリカに渡った。

4. アメリカで吹奏楽と共に歩む（1957年〜）

ニューヨークではクイーンズのアパートに住み、作曲家・指揮者として新生活を始めた。プロ向けの作曲依頼があり、室内楽を中心に楽譜の出版も増えた。晴れてアメリカ国籍が取得できた1962年、マンハッタン北部の聖エリザベス教会の合唱指揮者を引き受け、教会内の住居に転居した。

1964年3月、ネリベルはアトランティックシティで開催された全米音楽教育者会議（MENC）の総会、今でいうバンドクリニックのようなイベントに訪れた。ネリベルにとってバンドは行進や葬儀用の実用音楽で興味はなく、強引な誘いを断れず渋々の参加だった。ところが最初に聞いた大学バンドの演奏に心を奪われ、続いて中学生の演奏を聞いて「興味に火がついた」と振り返る。帰宅すると平易な吹奏楽曲を書き、近くの中学校で試奏してもらった。第一線のバンド指導者たちから作曲の委嘱が始まり、1965年に《コラール》《トリティコ》《シンフォニック・レクイエム》、翌年は《プレリュードとフーガ》《交響的断章》などの優れた作品を発表し、吹奏楽界に衝撃的なデビューを果たした。本日演奏される《トッカータ・フェローチェ》の原典版（木管合奏とピアノ）もこの頃の作品である。

日米で不動の人気を誇る《フェスティーヴォ》を出版した1968年に長女が誕生。子どもを自然の中で育てるために、コネチカット州の片田舎に転居した。翌年《二つの交響的断章》を作曲。《アンティフォナーレ》を書いた1971年には長男が誕生した。アメリカでは放送局や大学等に所属せず、原則として作曲に専念し、客演指揮やクリニック等で各地を巡った。1994年にペンシルヴァニア州スクラントン大学のコンポーザー・イン・レジデンスに迎えられたが、1996年3月22日に76歳で逝去した。生前に出版された作品は400曲あまり。後日、自宅の倉庫から未出版曲の楽譜が200曲ほど見つかった。ドロシア夫人がスクラントン大学に寄贈し、「ネリベル・コレクション」として管理されている。

壮絶な人生だった。適切な判断と行動で幾多の危機を乗り越えなかったら、ネリベルの作品は存在しなかった。学校オーケストラで楽しんだ記憶がなかったら、若者の演奏活動に共感することもなく、いわゆる現代音楽の作曲家の一人に名を連ねていた可能性もある。ネリベルが吹奏楽界に降臨し優れた作品を残してくれたことは奇跡というしかない。

あらためてネリベルの音楽のルーツはどこにあるのか？ 生まれはチェコというよりスラヴ系で、作曲家のヤナーチェクと同郷。幼い頃からロシア移民の大道芸や農婦たちの労働歌に親しんだ。大学ではネウマ譜を通してグレゴリオ聖歌などを研究。14〜16世紀頃の初期の教会音楽がネリベルの主たるフィールドだ。専門の楽器はオルガン。言語・文学・美術への造詣が深く、特に建

築に対する関心が手堅い楽曲構成に強く影響した。ネリベルの音楽はドミナントやトニックといった機能和声と縁がない。自らを「パンクロマティックな（全色の）作曲家」と称し 12 音を自在に操る一方、「私の音楽には重力がある」といい、動機やリズムの繰り返しによって集積したテンションを調性の中心音に帰着させる手法は、他の追従を許さない魅力となっている。

その大作曲家ネリベルに、なぜ未出版曲が多いのか？ スクラントン大学の公式ホームページには、作曲への情熱が勝るあまりマーケティングの時間がなかったと書かれている。確かにそうだろうが、おそらくスタンダードな編成の手頃な難度の曲が少ないことが関係しているはずだ。独奏を伴う吹奏楽曲・管弦楽曲や珍しい組み合わせの室内楽曲が多く、後年はプロ仕様の大規模な作品と初歩向けの小品に二極化する傾向にあった。ニューヨークを離れたことで出版社と疎遠になったのか、1975 年に自ら出版社を立ち上げ、初歩的な作品を中心に出版し（多くは自筆譜のコピーによる。パート譜も自筆）、結果的に晩年の 20 年間がいわば自費出版だった。今もドロシア夫人が未出版曲の楽譜をオンデマンドで提供している。他社からの新たな出版も始まったが、未出版曲全体からみればごくわずかでしかない。また、ネリベルは作曲の経緯や初演等の記録をほとんど残さなかったので、いつ誰のために書いたのか分からない楽譜が多数あるのも悩みの種だ。

こうなると、ネリベルとアルフレッド・リードは実に対照的に見えてくる。2 人とも放送局で実務経験を積んでから吹奏楽界にやってきた実力派という点は共通している。だが、リードはで楽しく演奏できる標準的な編成の曲を主に書き、プログラムノートと演奏上の手引も用意し、初演後はすみやかに出版された。それに対し、ネリベルはおそらく委嘱に沿った編成と独自の手法でユニークな作品を書き、初演が成功裏に終われば次の作曲に没頭したようだ。作曲だけでなくマーケティングにも才能を発揮したリードと、作曲家としての生き方を不器用なまで頑固に貫いたネリベル。どちらが良いとか悪いという問題ではない。見方を変えれば、リードが吹奏楽のすそ野を広げたのに対し、ネリベルは吹奏楽の高みを示してくれているようにも思える。

そのネリベルも来年 3 月で没後 20 年を迎える（注：2015 年現在）。この機会に中欧・東欧の歴史と伝統を現代に伝える匠の技をあらためて見直し、味わってみてはいいかがだろう。

村上泰裕プロフィール

1962 年生まれ、京都大学教育学部卒。リードやバルトークに関する著作がある他、ネリベルにも長年強い関心をもち、未出版楽譜の一部を預かって日本での普及に努める。山形県の中学校教諭を経て、現在バルトーク・レコーズ・ジャパン代表。

ホームページは http://y-murakami.jimdo.com/

ネリベルやリードの作品表など充実している。

2023 年度のグリーン・タイ ウインド・アンサンブルの演奏会は、7 月 11 日（火）（指揮：ダグラス・ボストック）、12 月 5 日（火）（指揮：ティモシー・レイニッシュ）を予定しています。
ぜひご来場ください。

洗足学園音楽大学
グリーン・タイ ウインド・アンサンブル
演奏曲目一覧

● 2009 年度
◇ 7 月 12 日　指揮：伊藤康英
諏訪雅彦　16 世紀のシャンソンによる変奏曲
伊藤康英　「昔の歌に寄せて」～ヴァイオリンと吹奏楽のための協奏曲（３楽章版初演）
　　ヴァイオリン独奏：水野佐知香
伊藤康英　こきりこ行進曲
高　昌帥　パンソリック・ラプソディ
伊藤康英　広島の朝の歌
（アンコール）
伊藤康英　木星のファンタジー
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇ 12 月 6 日　指揮：ダグラス・ボストック
N.dello Joio　中世の旋律による変奏曲
P.A.Grainger　ローマの権力とキリスト教徒の心
D.Bedford　波濤にかかる虹
J.B.Chance　朝鮮民謡による変奏曲
Ph.Sparke　ダンス・ムーヴメンツ

◇ 3 月　指揮：伊藤康英／ダグラス・ボストック
台湾新竹市・台北市（國家音樂廳）
管樂狂潮（台湾・新竹教育大学との合同演奏会）
伊藤康英　広島の朝の歌
伊藤康英　地球
伊藤康英　台湾花束

● 2010 年度
◇ 7 月 21 日　指揮：ダグラス・ボストック
～吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと vol.1～
G.Holst　吹奏楽のための第 1 組曲 変ホ長調
D.Milhaud　フランス組曲
I.Stravinsky　エボニー・コンチェルト
　　クラリネット独奏：山本茉莉奈（4 年）
P.Hindemith　交響曲変ロ調
P.A.Grainger　リンカンシャーの花束

◇ 11 月 27 日　指揮：本名徹次
For the Green Earth　「展覧会の絵」～緑の地球のために
三善　晃　札幌オリンピック・ファンファーレ
矢代秋雄　吹奏楽のための祝典序曲「白銀の祭典」
野田暉行　吹奏楽のための典礼風序曲
伊藤康英　三部作「惑星」より「地球」
M.P.Moussorgsky　伊藤康英版「展覧会の絵」（2 台 8 手ピアノ、サクソフォーン四重奏、混声合唱と吹奏楽のための交響的カンタータ）
（アンコール）
トラディショナル（伊藤康英）　アメイジング・グレイス
伊藤康英　一度っきりの人生

● 2011 年度
◇ 7 月 18 日　指揮：ダグラス・ボストック
～吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと vol.2～
夜から朝へ　Night and Day
A.Copland　エンブレムス
G.Holst　吹奏楽のための第 2 組曲ヘ長調
P.A.Grainger 民主主義行進の歌／コロニアル・ソング／ガム・サッカーズ・マーチ
武満　徹　ナイト・シグナル
伊藤康英　明けない夜は無い（世界初演）
A.Roussel　栄光の日
F.Schmitt　ディオニソスの祭
（アンコール）
伊藤康英　にっぽんモーリス

◇ 11 月 26 日　指揮：増井信貴・鄭哲男・伊藤康英
高　昌帥　吹奏楽のためのラメント
西村　朗　秘儀Ⅰ　管楽合奏のための
保科　洋　吹奏楽のためのカプリス（2005 改訂版）
伊藤康英　サクソフォーンとユーフォニアムのための二重小協奏曲「カーニヴァルの日」（世界初演）
サクソフォーン独奏：小林　悟（4 年）
ユーフォニアム独奏：幸崎　仁（4 年）
★台湾国立新竹教育大学（現・清華大学）管楽団と合同で
伊藤康英　相馬フェスティヴァル・マーチ
陳　樹熙　客家風狂詩曲（日本初演）
伊藤康英　吹奏楽のための交響詩「ぐるりよざ」
　　龍笛独奏：吉川真登
（アンコール）
高野辰之（伊藤康英）　ふるさと（新編曲・初演）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

● 2012 年度
◇ 7 月 11 日　指揮：秋山和慶
伊藤康英　交響詩「コラール幻想曲」
長生　淳　香り立つ刹那
新垣　隆　吹奏楽のための小品
G.Gershwin（伊藤康英）　ラプソディ・イン・ブルー
ピアノ独奏：伊藤康英
G.F.Handel（伊藤康英）　王宮の花火の音楽より序曲
J.S.Bach（伊藤康英）　シャコンヌ
（アンコール）
J.S.Bach（伊藤康英）　G 線上のアリア（新編曲・初演）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇ 12 月 15 日　指揮：ダグラス・ボストック
～吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと vol.3～
R.Vaughan Williams　イギリス民謡組曲（第 2 楽章として「海の歌」を含む）
R.Vaughan Williams　交響曲第 8 番より第 2 楽章「行進曲風スケルツォ」
P.A.Grainger　ヒル・ソング第 2 番
P.A.Grainger　ワムフレイの若者たちの行進曲
V.Nelhybel　トリティコ
K.Husa　プラハのための音楽 1968
（アンコール）
P.A.Grainger　デリー地方のアイルランド民謡

● 2013 年度
◇ 7 月 3 日　指揮：秋山和慶
時は逝く　As Time Is Passing On
兼田　敏　吹奏楽のための寓話
藤田玄播　天使ミカエルの嘆き
M.P.Moussorgsky（伊藤康英編曲）　歌劇「ソロチンスクの市」より「聖ヨハネ祭の夜」
伊藤康英　貝殻のうた
高　昌帥　優しい花たちへ
伊藤康英　交響詩「時の逝く」
（アンコール）
にっぽんモーリス

◇ 11 月 11 日　指揮：ダグラス・ボストック
吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと Vol.4
アメリカへ　An American Connection
D.Milhaud　ウェスト・ポイント組曲
P.A.Grainger　ローマの権力とキリスト教徒の心
A.Schoenberg　主題と変奏
黛　敏郎　打楽器協奏曲
V.Nelhybel　復活のシンフォニア

● 2014 年度
◇ 7 月 12 日　指揮：ダグラス・ボストック
～吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと vol.5～
P.A.Grainger　モールバラ伯爵のファンファーレ
R.Vaughan Williams　トッカータ・マルチアーレ
G.Holst　ハマースミス 前奏曲とスケルツォ
D.Bedford　波濤にかかる虹
P.A.Grainger　子供のマーチ「丘を越えてかなたへ」

三善　晃　スターズ・アトランピック’96
J.Absil　祭典 op.79（日本初演）

◇７月21日（吹奏楽の祭典）　指揮：大滝 実
S.Rachmaninoff （伊藤康英）　交響的舞曲より第１楽章（新編曲・初演）

◆12月７日　指揮：増井信貴／プレトーク：滝澤尚哉・伊藤康英
フェネルがわたしたちに伝えたかったもの　What Fred Told Us
C.Williams　ファンファーレとアレグロ
R.R.Bennett　シンフォニック・ソング
G.Holst（伊藤康英校訂）　吹奏楽のための第１組曲
J.B.Chance　朝鮮民謡による変奏曲
伊藤康英　管楽器のための序曲
R.Strauss（伊藤康英）　万霊節 op.10-8（新編曲・初演）
R.Nelson　モーニング・アレルヤ
群馬県民謡（岩井直溥）　八木節
J.P.Sousa　海を越える握手
H.Fillmore　ヒズ・オナー
（アンコール）
伊藤康英　Get Well, Maestro
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

● 2015年度
◇６月24日　指揮：藤岡幸夫
J.Barnes　祈りとトッカータ
S.Rachmanioff （伊藤康英）　交響的舞曲より第１楽章
西村　朗　秘儀 III—旋回舞踊のためのヘテロフォニー
伊藤康英　吹奏楽のための交響詩「ゴー・フォー・ブローク」
R.Wagner（伊藤康英）　歌劇「ローエングリン」第２幕より「エルザの大聖堂への行列」（新編曲初演）
R.Schumann（伊藤康英）　歌曲集「ミルテの花」より「献呈」（初演）
A.Reed　第２交響曲
（アンコール）
A.Reed　第２組曲より「ソン・モントゥーノ」
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇12月12日　指揮：ダグラス・ボストック
吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと　Vol.6
チェコからの風　The Czech Connection
L.Janáček「シンフォニエッタ」よりソコル・ファンファーレ
K.Husa アル・フレスコ
V.Nelhybel 吹奏楽とピアノ独奏のための「トッカータ・フェローチェ」（日本初演）
ピアノ独奏：遠藤龍軌（２年）
A.Reed アルメニアン・ダンス・パート２
伊藤康英　彼がわたしたちに語ったこと　バリトン、ソプラノと吹奏楽のために（日本初演）
バリトン独唱：泉　良平（客員教授）
ソプラノ独唱：伊藤紫央里（本学卒）
Eb コルネット：植竹祐太（４年）
P.A.Grainger 固定されたド（自鳴する C）
F.Ticheli エンジェルス・イン・ジ・アーキテクチャー
ソプラノ独唱：伊藤紫央里
（アンコール）
J.Fučík フロレンティーナ行進曲
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

● 2016年度
◇７月15日　指揮：藤岡幸夫
吹奏楽燦選 藤岡幸夫と伊藤康英が選ぶ神７！
三善　晃　吹奏楽のための「クロス・バイ・マーチ」
J.A.Caudill バンドのための民話
R.Jager シンフォニア・ノビリッシマ
F.Schubert（伊藤康英）アヴェ・マリア（エレンの歌 第３番）（新編曲・初演）
河辺公一　高度な技術への指標
L.Bernstein プレリュード、フーガとリフ
クラリネット独奏：大森雅弘（４年）
V.Nelhybel 復活のシンフォニア（V.Nelhybel）
伊藤康英　吹奏楽のための序曲「平和と栄光」
副指揮：竹内健人（４年）
（アンコール）
カタロニア民謡（伊藤康英）　鳥の歌（新編曲・初演）
トロンボーン独奏：松原昇平
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇12月６日《指揮：ダグラス・ボストック》
～吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと vol.7～ 温故知新 Old Wine in New Bottles
G.F.Handel「王宮の花火の音楽」より序曲　ブーレ　歓喜（新編曲・初演）
Ph.Sparke リフレクションズ～ある古い日本俗謡による
伊藤康英　津軽三味線協奏曲
津軽三味線独奏：山中信人（本学講師）
津軽三味線合奏：稲沢茉梨　谷川祐司　塚本 鷹　塚本準也　横田匡
P.A.Grainger リンカンシャーの花束
E.Gregson 剣と王冠

● 2017年度
◇６月22日　指揮：ティモシー・レイニッシュ／藤岡幸夫
P.A.Grainger 民主主義行進の歌
G.Holst（伊藤康英校訂）　吹奏楽のための第１組曲
J.S.Bach（伊藤康英）　シャコンヌ（2017新編曲・初演）
K.Hesketh ダンスリーズ
L.S.Alarcón ドゥエンデ　吹奏楽のための４つの前奏曲（日本初演）
A.Gorb イディッシュ・ダンス
（アンコール）
J.Brahms（伊藤康英）　日曜日／恋人のもとへ
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇12月12日　指揮：ダグラス・ボストック
古典名曲を名匠ボストック氏と Vol.8
イギリスとフランスとの長い戦争の歴史を振り返りながら、今、考える平和。Anglo-French Gala
L. van Beethoven（伊藤康英）　交響曲「ウェリントンの勝利またはヴィットリアの戦い」作品91（新編曲・初演）
R.Vaughan Williams イギリス民謡組曲
F.Schmitt ディオニソスの祭
D.Milhaud フランス組曲
伊藤康英　グリーンスリーヴスの主題による幻想曲（世界初演）
E.Gregson 王たちは出陣する
（アンコール）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇2018年３月９日　指揮：伊藤康英／ダグラス・ボストック
台湾新竹市
管樂狂潮（台湾・清華大学との合同演奏会）
伊藤康英　煌夜～祭の幻想
伊藤康英　グリーンスリーヴスの主題による幻想曲
伊藤康英　交響詩「ぐるりよざ」
A.Reed　アルメニアン・ダンス パート１
P.A.Grainger　子供のマーチ「丘を越えてかなたへ」
Ph.Sparke　宇宙の音楽

● 2018年度
◇７月１日　指揮：ティモシー・レイニッシュ
ティモシー・レイニッシュ 80歳記念
戦争と平和 War and Peace
A. Gorb アウェイデイ
G.Woolfenden イリュリア人の踊り（日本初演）
D.del Tredici 戦時に
L.S.Alarcón コンチェルタンゴより第１楽章（日本初演）
アルト・サクソフォーン独奏：荒木真寛（４年）
伊藤康英　タイム・イントゥ・ミュージック（日本初演）
C.Marshall ロム・アルメ（武装した人）変奏曲（日本初演）
（アンコール）
メンデルスゾーン（伊藤康英）　歌の翼に（新編曲・初演）
伊藤康英　にっぽんモーリス

◇12月11日　指揮：ダグラス・ボストック

グリーン・タイ 10 周年記念
吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと Vol.9
リジョイス！ 祝賀 Rejoice!
伊藤康英　吹奏楽のための祝祭曲「集え、祝え、歌え」
O.Waespi　讃歌（日本初演）
J. シュテルト　バッハザイツ
A.Hovhaness 交響曲第 53 番「星の燭光」作品 377（日本初演）
V.Nelhybel The S-S-S（砂粒・静けさ・寂しさ）（世界初演）
真島俊夫　三つのジャポニスム

● 2019 年度
◇ 6 月 25 日　指揮：ティモシー・レイニッシュ
R.Vaughan Williams (ed. F.L.Battisti) トッカータ・マルチアーレ
P.A.Grainger ローマの権力とキリスト教徒の心
高　昌帥　ウインドオーケストラのためのマインドスケープ
伊藤康英　彼がわたしたちに語ったこと　バリトンと吹奏楽のために（日本初演）
バリトン独唱：泉　良平（本学客員教授）
K.Hesketh ダンスリーズ（セット II）
A.Gorb クレタ島の舞曲
（アンコール）
L.S.Alarcón TIM～ブリティッシュ・パソ・ドブレ（日本初演）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

◇ 12 月 10 日　指揮：ダグラス・ボストック
V.Nelhybel アンティフォナーレ 金管六重奏と吹奏楽のために
P.A. グレインジャー　コロニアル・ソング
松下 功　天空の祈り～とうとき命に～
伊藤康英　ピース、ピースと鳥たちは歌う
G. ホルスト　ハマースミス 吹奏楽のための前奏曲とスケルツォ
Ph. スパーク　宇宙の音楽
（アンコール）
P.A. グレインジャー　岸辺のモリー
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

● 2020 年度
（前期コンサートは、COVID-19 の影響により中止）

◇12月1日　指揮：藤岡幸夫／伊藤康英
A.Reed　音楽祭のプレリュード
L.Serrano Alarcón　小組曲（日本初演）
L.Serrano Alarcón　演奏会用パソドブレ「ラ・リラ・デ・ポズエロ」（日本初演）
C.T.Smith　フェスティヴァル・ヴァリエーションズ
R.Kurka　組曲「善良な兵士シュヴェイク」Op.22より
序曲　ラメント　フィナーレ
伊藤康英　交響詩「ぐるりよざ」より第１楽章
Ph.スパーク　ドラゴンの年
（アンコール）
伊藤康英　悲しみから歓びへ（３声のカノン）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

●2021年度
◇7月13日　指揮：藤岡幸夫
伊藤康英　古いスペインの歌によるディフェレンシアス（初演）
山下康介　蠢動のワルツ（吹奏楽版委嘱／初演）
松下倫士　ラメント～旧約聖書「哀歌」に基づいて
Ph.Sparke　古い日本民謡によるリフレクション
三浦秀秋　バロック・コンチェルト
J.van der Roost／カンタベリー・コラール
鹿野草平　交響曲第１番《2020》より第４楽章「叡智」
（吹奏楽版共同委嘱／初演）

◇11月30日　指揮：高 昌帥
高 昌帥　今、吹き渡る風
F.ティケリ　ヴェスヴィアス
～カレル・フサ生誕100年記念～
K.フサ　チーター
大栗 裕　大阪俗謡による幻想曲
高 昌帥　まじなひ～その参
高 昌帥　ナイトフォニー
高 昌帥　コリアン ダンス

●2022年度
◇6月28日　指揮：藤岡幸夫
伊藤康英　コラール前奏曲「おお、人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」による幻想曲
C.Likhuta　ホーム・アウェイ・フロム・ホーム（日本初演）
D.Milhaud　フランス組曲
K.Husa　プラハ1968年のための音楽
伊藤康英　ピース、ピースと鳥たちは歌う

◇2023年2月19日（東大和市ハミングホール）
鈴木英史　ジェネシス
F.ショパン（伊藤康英編曲）　革命のエチュード
F.ネリベル　ファンタジア
D.ミヨー　フランス組曲より
W.A.モーツァルト　夜の女王のアリア
宮下秀樹　エール・マーチ
宮下秀樹　ポロネーズとアリア
伊藤康英　スパニッシュ・ホルン
伊藤康英　ピース、ピースと鳥たちは歌う
（アンコール）
伊藤康英　マーチ「一度っきりの人生」

Members

洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブル
Senzoku Gakuen College of Music Green-Tie Wind Ensemble

学園の色の一つ「緑」を冠した吹奏楽授業。2009年、作曲家・伊藤康英と共に始動。作曲家の視点を交えた楽曲分析やこだわりの選曲が特徴。これまでに、ダグラス・ボストック氏とは10回にわたる「古典名曲シリーズ」を継続、日本初演、世界初演曲も数多く紹介してきた。またティモシー・レイニッシュ氏ら名だたる指揮者を招聘。藤岡幸夫氏がナビゲーターを務めるBSジャパンの人気クラシック番組「エンター・ザ・ミュージック」にもたびたび出演。また、台湾、シンガポール、韓国にて交流演奏会を行っており、広くアジアにも多くのファンを擁する。

Concertmistress	笠 歌純	Inspector	佐野 鈴菜	植田 優花	大石 水紀	
Flute	佐野 鈴菜	辻 陽香	土持 志織＊	中川 彩	石川 裕葵	行徳 ほのか
	清水 花恵	山田 希宝	瀧本 こころ	中村 愛美	足達 月菜	
Oboe	入谷 栞＊	岸原 伶奈	奥野 彩♪			
Clarinet	福永 愛華	伊藤 眞緒＊	笠 歌純	TRAN NGUYEN NGOC ANH	村松 優衣	矢ヶ﨑 貴史
	有田 春花	宇佐美 碧	薄井 萌々子	曽山 舞美	松﨑 稀菜	上條 里彩♪
	大木 舞♪	平野 佳太♯				
Bassoon	笹 紘実♯	髙橋 遥♯	中間 奏莉♯			
Saxophone	國澤 美空	岩城 玄仁＊	岸本 楓	高橋 星良	大幸 拓未	亀澤 咲葵
	渋谷 瑛奈	下藤 香花	八木 寛菜	山崎 遼介	熊木 萌奏	中原 雄太郎♪
Horn	佐藤 俊輝＊	梶田 茉朋	種子田 佳歩	植田 香帆	山田 日香流	淺田 万結♪
	石野 奈々♪					
Trumpet	植田 優花＊	佐々木 右京	谷口 諒	石井 華音	神山 柾紀	手塚 柚季
	友野 楓	樋口 萌々花	稲田 菜摘	小松 美羽	野村 日菜乃	
Trombone	永吉 彩花	三浦 健＊	宇賀那 晴臣	CHI YAN-JEN	伴 芽衣菜	望月 愛永
	鵜飼 輝	神田 拓海				
Euphonium	佐々野 広雅	関口 嬉架＊	加藤 千聖♪	清水 榛菜♪		
Tuba	下田 真寛	寺﨑 栞＊	櫻井 希有	佐藤 凪紗	丸山 結希帆	
Contrabass	髙野 響花♯	横山 葉瑠奈♯				
Percussion	榎本 耀	大石 水紀＊	林 英希	古橋 優実	前田 伶弥	大野 紗楽
	小川 友李江	川﨑 友仁	廣木 太陽	渡辺 優生	竹内 夏美	大塚 愛美♪
	近藤 寛人♪	栃下 紗奈♪				
Piano	西村 ゆき乃♪					
Harp	熊倉 実里♯					

♯…演奏補助要員　♪…賛助　＊パートリーダー

合奏指導教員	伊藤 康英	瀬尾 宗利	小川 佳津子	鈴木 英史
企画運営責任者	伊藤 康英			